

第39回 中区明るい選挙推進作文コンクール

入

賞

作

品

集



中区明るい選挙推進協議会



第39回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に247作品、小学生B部門(4～6年生)に809作品、中学生部門に347作品、合計1,403作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/>

目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・金賞（中区長賞）	中国語を話せるようになりたい	間門小学校	三年	岡崎	航士	…	1
・銀賞	日本のはじめてがいっぱいあるまち	北方小学校	一年	水野	ひかる	…	2
	大和町商店街	立野小学校	三年	松本	暁	…	3
・銅賞	ぼくのうち	北方小学校	一年	梶佐古	湊弘	…	4
	大すきな本牧	間門小学校	一年	立花	栄樹	…	5
	バスいっぱいのすてきな町	本牧南小学校	二年	佐藤	大嘉	…	6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）	みんなの笑顔のために	間門小学校	六年	池田	有杏	…	7
・銀賞	感謝の気持ちを忘れずに	大鳥小学校	六年	佐々木	陽向	…	8
	世界中のまちをバリアフリーに	大鳥小学校	六年	宮井	萌歌	…	9
・銅賞	私が考えるすてきな町	大鳥小学校	五年	河村	奈心	…	10
	ゆずりあい	北方小学校	六年	鰐部	みか	…	11
	挨拶の力	立野小学校	六年	相馬	琢人	…	12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）	明日の社会への選択肢	横浜雙葉中学校	三年	小田	夏奈香	…	13
・銀賞	六年後の自分に向けて	仲尾台中学校	一年	岩崎	実怜	…	14
	1人の国民として	仲尾台中学校	一年	平岡	蒼空	…	15
・銅賞	一票の意味	仲尾台中学校	一年	軍司	励	…	16
	選挙による暮らしの変化	仲尾台中学校	一年	谷口	はるか	…	17
	身近な問題から選挙を考える	横浜雙葉中学校	三年	原田	華	…	18

小学生A部門

☆☆☆ 金賞（中区長賞） ☆☆☆

「中国語を話せるようになりたい」

間門小学校

三年

岡崎

航士



「ニーハオ」これは、中国語のあいさつです。意味は、おはよう、こんにちはです。「シエシエ」これは、中国語でありがどうの意味です。近所に住んでいる中国人のおばちゃんが教えてくれました。おばちゃんの名前は王さんです。中国人の名前で、王という名前は、たくさんいるそうです。王さんは、ぼくの事を「ぼく」とよびます。おもしろくて、楽しい人です。なぜぼくが王さんと会話ができるかというと、王さんは、日本語がペラペラだからです。本当にすごいと思います。

王さんは、ぼくに中国語を教えてくれるだけじゃなくて中国料理を作ってくれたり、おかしをくれます。中国料理は、ぼくの知っているマーボー豆腐やチンジャオロースーとはぜんぜんちがいます。でもとてもおいしいです。おかしは、お月様のような丸い形をしたおかしで、げっぺいという名前です。中国で昔から親しまれているおかしです。

王さんのおかげで、ぼくは、中国についてとてもきょうみを持ちました。世界地図で調べたら、とても大きな国でした。せまい日本にどうして中国人がたくさんいるのかふしぎです。横浜市の中で、中区は中国人が一番多い町だそうです。そういえば、中華街もあるし、ぼくの近所にも中国人がたくさん住んでいます。そして、日本人と中国人が仲良くくらししています。みんなが仲良く笑顔でくらしせる町は、すてきだと思います。だからぼくは、この町が好きです。

ぼくは、習い事で英語の勉強をしています。でも、これからは、中国語の勉強もしたいと思います。なぜなら、ぼくの周りには、英語を話す人よりも中国語を話す人の方が多いからです。中国語は、発音がむずかしくてたいへんです。でも王さんに教えてもらいながらがんばって覚えて中国語を話せるようになりたいです。そして、横浜に旅行に来ている中国人に、かん光案内をして、もつと横浜を好きになつてもらいたいです。

〈講評〉

中国人のご近所さんとの、中国語でのあいさつや中国料理などを通じたやり取りがとても微笑ましい、素敵なお作文でした。「みんなが仲良く笑顔で暮らせる町はすてきだ」の一文に改めて考えさせられるとともに、作文の最後にある筆者の素晴らしい夢には頼もしさを感じました。

横浜市、特に中区には中国人をはじめ、多くの外国人が住んでいます。文化や言葉が違う人たちがお互いに理解しあい、共に暮らしていくことで、中区がもつと良い町になることを切に期待しています。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「日本のはじめてがいっぱいあるまち」

北方小学校

一年

水野

ひかる

わたしのがっこうのちかくに「キリン公えん」というなまえの公えんがある。すべりだいがキリンのくびのかたちをしているからだとおもっていた。

お父さんにきいてみたら、

「どうぶつのキリンじゃないよ。むかし、そこにキリンビールというおさけのころじょうがあつたんだよ。」

とおしえてくれた。

よこはまにはほかにたくさんのはじめてがあることもおしえてくれた。

なつ休みにお父さんと、よこはまのはじめてをさがしにいった。

あるいたり、でんしゃにのつてさがした。がっこうのちかくのキリン公えんにいくと、いしでできているきねんひがあつた。

きみがよ、すいそうがく、テニス、公えん、ペンキ、氷、ガスとう、アイスクリーム、てつどう、でんき、ホテル、ようふくやさん、クリーニングが、よこはまではじめてできたとかいてあつた。

氷のきねんひは、もとまちえきのちかくの木にかくれていてみつけるのがたいへんだつた。

ようふくやさんのきねんひは、中かがいのちかくにあつた。きれいな女の人のせきぞうがあつて、いっしょにしゃしんをとつた。

お父さんがもっていたまんぼけいを見たら、一まん九千ぼもあるいていた。すぐくつかれたけど、きねんひをさがすのがたのしかつた。

よこはまには、はじめてがいっぱいあることがわかつた。すてきなまちだから、みんなにもしつてほしいとおもつた。

〈講評〉

学校の近くにある公園をきつかけに知つた「日本のはじめて」。お父さんと一緒に一万九千歩も歩いてしまうくらい夢中になつて筆者の姿が伝わってきました。何気なく過ごしている横浜には、たくさん「はじめて」があります。調べれば調べるほど、知れば知るほど、横浜の魅力に気付き、横浜がさらに好きになつていくことでしょう。見つけた「すてき」をたくさん友達に伝えていってください。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「大和町商店街」

立野小学校 三年 松本 暁

わたしが通学する時、いつも大和町商店街を通ります。わたしは、大和町商店街が大好きです。

中でも、一番好きなのは、大和町商店街の人たちがみんな明るいところです。大和町商店街で、店の人たちやボランティア活動の人たちがあいさつをしてくれのを、わたしは毎朝楽しみに学校に行っています。

このほかにも好きなのところがたくさんあります。それは、商店街がいつもキレイなところです。いつも学校でわたしたちがべんきょうをしている間に、店の人がおきやくさんにせつきやくをしながらもそうじをしているからだと、商店街ではたらいていたおかあさんがいました。

大和町商店街にはわたしの好きなお店もあります。それは、わたしが休みの日によく行くだがし屋さんの「おふじ」というお店です。おふじは夜9時まで開いているので、仕事帰りに立ちよる大人も少なくはないそうです。そして、わたしがおふじで一番好きなのは、お店の人にいつ話しかけてもやさしくこたえてくれるところです。それは、ほかのお店も同じです。わたしは一つのお店でいいところや好きなのところを見つけると、まわりのお店も同じように好きになったかんじがします。このように、お店の人たちやボランティア活動の方が、わたしたちが気持ちよくくらするようにしてくれているので、毎日安心して通学することができます。これが、わたしが大和町商店街のことを大好きな理由です。いつも大和町商店街の方にかんしゃしています。

〈講評〉

商店街のよさを「商品」ではなく、挨拶や掃除、声かけなどをする「人」としているところが、この作文をきらりと光らせているポイントだと感じました。商店街で働く人たちと、そこで買い物をする人たちとの繋がりがもたらす安心や活気。文章を読みながら「わたしもこの商店街に行ってみたいな。」と思わせる作文でした。素敵な商店街との関わりをこれからも大切にしていってください。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「ぼくのぼく」

北方小学校 一年 梶佐古 凌弘

ぼくはこのまちにあるぼくのうちがすきです。

あさげんかんのドアをあけるとおおきなそらがみえます。ジャンプするとおおきなはしにくるまがたくさんみえます。なんだかいいにおいがします。ままにいうとおのかおりだねといえます。したをみるとかわにくらげがいたり、かもがおよいでいたりします。となりから2くみのりのちゃんがでてきます。いつしよにしたにおりとおともだちがあつまってきます。ままたちとかんにんのおじさんがてをふってくださいます。ぼくはうれいきもちになつてみんなでがつこうにいきます。

かえりみち、みなとのみえるおかこうえんからぼくのいえをみるのもすきです。あさ、ひやくよんじゆうろくだんのぼるのととてもたかいです。みずいろのそらがひろくひろくとおくまでみえます。めをしたにむけるとぼくのうちがみえます。いくときはのぼるのがとてもたいへんだけど、かえるときはがんばったごほうびをもらったようなきもちになれます。おうちにかえられるなーとうれしくなります。おうちにかえるとだいすきなおとうとのゆうくんがすごいえがおでまっています。ゆうくんといつしよにおそとのろうかから、うみのおおきなふねをみたり、かわのみずのりようをみたり、ゆうやけぞらを見てるとたくさんのごきんじよさんがこえをかけてくれてえがおになります。

ぼくはいろんなたのしいことがあるのでまいにちたくさんわらっています。ぼくはわらうことがすきなのでうれいんです。

だから、ぼくはこのまちにあるぼくのうちがだいすきです。

〈講評〉

見上げれば大きな空、ジャンプをすれば大きな橋に車、下を見ると川を泳ぐクラグや鴨。まちにあふれる筆者の「大好き」を読んでいると、思わずあたたかい気持ちになりました。そして大好きな弟がいて、海の景色が見える窓のある「ぼくのうち」も、この大好きなまちの一部なのです。大好きなぼくのまち、ぼくのうちをこれからも大切にしていってください。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「大すきな本牧」

間門小学校 一年 立花 栄樹

ぼくは、本牧にすんでいます。ぼくのおとうさんも、ちいさいころからずっと本牧にすんでいます。じいじもむかしからずっと、本牧にすんでいます。

おとうさんは、

「しごともしっぱいできるし、うみもおおきいこうえんもいっぱいあるし、じいじとばあばもすんでいるから、おとうさんは本牧がすきなんだよ。」
と、いっていました。

たしかに、うみがちかいから、ぼくは、やすみの日に、おとうさんとおとうとといっしょに、あさはやくおきて、タコやアジをつりにいきます。つってきたおさかなは、おさしみにするとしんせんでとってもおいしいです。

それに、山もあるから、たんけんしたり、むしとりとかいろんなしよくぶつとかをみつけてあそべます。

きのうは、うちのにわに山からきたバッタとかセミとかトカゲがいたから、つかまえてかんさつしました。

あと、山ちようこうえんのでつぺんからは、おとうさんがはたらいているみなとのガントリークレーンが、よくみえます。

だから、ぼくは、ちいさいころから、山ちようこうえんにおさんぽにいくと、ガントリークレーンにむかって

「おとうさん、がんばれ！おとうさん、がんばれ！」

と、おおきなこえでおうえんします。

あとで、おとうさんが

「えいきのこえがきこえたから、しごとがんばれたよ。ありがとう。」
と、いっていました。

そういわれて、ぼくもうれしくなりました。

ぼくも、おとうさんみたいにずっと本牧にすんでいたいです。本牧が大すきです。

〈講評〉

お父さん、そしておじいちゃんやおばあちゃんも住んできた本牧。新鮮な魚のとれる海や、生き物をたくさん見つけられる公園、お父さんの働く港など、家族みんなに愛されている本牧というまちの魅力が伝わる作文です。ずっと住み続けたいと思えるまちに暮らせているというのは、とてもすてきなことだと思います。これからも大好きな家族やまちを大切に過ごしていつてください。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「バスいっぱいのすてきな町」

本牧南小学校 二年 佐藤 大嘉

ぼくのまちのすきなところは、バスがたくさんはしっているところです。りゅうは二つあります。

一つ目は、ぼくのすんでいる本牧はえきまでとおいけれど、バスがたくさんはしているのであまりこまらなからです。そして、バスのうんでん手さんはやさしくてしんせつです。ぼくは、今までに二回本牧車こに見学に行ったことがあります。そこでえいぎょうしよのたてものの中やせいびじょうをあんないしてもらったり、「あかいくつ号」とつなひきをさせてもらったりしました。またうんでんせきにすわらせてもらえて、とてもうれしかったです。

二つ目は、バスじたいがすきだからです。前に、いすゞプラザに行った時、バスがてんじしてあり、のることができて近くでじっくり見たことでした。また、今年の夏休みに市電ほぞんかんに行きました。バスがはしる前は市電がかつやくしていたことを知って、びっくりしました。見た目やクリーム色と青色の車体が、今の市えいバスにそっくりでした。そして「しでん花電車」がカラフルに光っていてきれいだったので、今もはしっていたらいいなと思いました。

ぼくのしょうらいのゆめがアナウンサーなので、ぼくのすんでいる町横浜のすてきなところをテレビでたくさんしょうかいしたいです。とくにtvkのアナウンサーになりたいと思っています。なぜならtvkは、横浜のテレビきよくで、横浜のことをたくさんしょうかいできるからです。横浜には、バスだけではなく、ほかにもたくさんすてきなところがあります。まだぼくの知らないこともあると思うので、これからも見つけていきたいです。

〈講評〉

バスも自分たちのまちを彩る大切な一部なのだど気付かせてくれる作文です。バスと関わる人たちや、バスそのものへの気持ちや、自分の経験や感じたことを取り入れながら上手に書き表しています。将来、アナウンサーになったら、この作文のように、横浜のすてきなところをたくさん伝えてほしいです。そのために、これからも横浜のすてきなところをたくさん見つけていってください。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）

☆☆☆

「みんなの笑顔のために」

間門小学校 六年 池田 有杏



私が住んでいるマンションの隣には、公園があります。大きな公園ではないけれど、桜の木が何本もあって、春になるととてもきれいな花を咲かせます。家のベランダからでもお花見が出来るのが、少し自慢です。でも、桜の木以外に心が惹かれるものはありませんでした。ベンチがいくつもあるだけで、遊具は全然なく、いつ来ても、辺り一面に草が生い茂っていました。だから、私にとっては「公園」というより「空地」に近い印象でした。その公園が、今年の春に整備され、新しくなりました。まだ桜のつぼみも付いていない寒い時期に、母から「隣の公園がきれいになるらしいよ」と聞かされ、春が来るのが、いつもよりも楽しみになったのを覚えています。

新しい学年に変わる、ちょうど同じ頃に、隣の景色が一変しました。わくわくするような遊具が設置され、ベンチも新しい物に変わりました。雑草だらけだった地面がアスファルトになり、いくつも並んだ嚴重な柵が利用者の安全を守ってくれていました。明るくきれいになった公園が、満開の桜をより美しく魅せてくれていたように感じました。午前は保育園の子供達や小さな赤ちゃんを連れのお母さん達、お散歩中のお年寄りが集い、午後は学校帰りの小学生達が暗くなるまで遊んでいます。朝から夕方まで、たくさんの方が楽しい時間を過ごしています。私もそんな声につられて、友達と遊びに行きました。目にするものがきれいだと嬉しくなるし、たくさんの方が集まっていると楽しくなります。そして、みんなが笑っていると自分も元気になるんだと、心から感じました。

身近にある小さな公園から、山下公園、港の見える丘公園のような大きな公園まで、横浜市には約2600もの公園があります。そのうち中区には、平成31年4月現在、大小合わせて90の公園があることが分かりました。そして、これらの公園の管理は区や市の行政が行うだけじゃなく、「公園愛護会」という地域のボランティアの方々の協力を得ていることを知りました。公園の清掃や除草、花壇の手入れ、利用者へのマンナーの呼びかけ等の活動を通して、地域住民が協力して公園をきれいに保ち、安全に楽しく利用出来るように見守ってくださっているそうです。当たり前のように花壇に咲いている季節の花も、ゴミ一つ落ちていない青々とした芝生も、迷わず利用出来るベンチやテーブルも、決して当たり前ではなく、このようなボランティアの方々のおかげで、公園は災害時に避難場所としても機能し私達を守ってくれます。私達が日常的に公園を大切にし、いざという時に、公園が私達を守ってくれる、このことが笑顔あふれる街へとつながっていくのだと思います。

〈講評〉

隣の公園のリニューアルによって筆者の公園に対する見方がいろいろと開けてくる心の様子が手に取るようにわかる、すばらしい作文です。

公園が持つ役割、その公園を守る人、利用する人たちの人間模様が良く描かれてよかったです。公園には清掃する人や安全を見守る人がいたり、花や笑顔があったりと公園を中心に一つの地域が作られています。このように素晴らしい地域で中区をいっぱいにしたいですね。

☆☆銀賞☆☆

「感謝の気持ちを忘れずに」

大鳥小学校 六年 佐々木 陽向

「心をくだかれたはずの日本がロッカールームを美しくして去る。」

これは、ワールドカップで悲願のベスト8進出まであと一步のところまで敗退したサッカー日本代表がおこした行動を賞した、イタリアの新聞紙の記事だ。試合に負けて、悲しくてくやしくて心はボロボロのはずなのに、使用したロッカールームを使用前かと思うほどきれいな状態にして立ち去った。ロシア語で「ありがとう。」という言葉を書いた紙を添えて。この記事を読んだ時、私は、同じ日本人として、とてもほこらしく思った。

私の小学校では、宿泊体験学習のとき、「最後の日には、来た時よりもきれいにして帰りましょう。」と教わる。四年生の時には、クリーンアップ実行委員がいて、どのクラスが多くのゴミを拾い、一番きれいにそうじをすることができるか競争をした。どのクラスも一位をとれるように、ふ段はそうじをしないようなところも、細かくていねいにそうじをした。五年生、六年生の時には、クリーンアップ実行委員はいなかったけれど、宿泊体験学習の目標の一つとして「感謝の気持ちを持って行動しよう。」というものがあつた。だから、施設の人へのありがとうの気持ちを込めて、みんなでそうじをした。一生けん命そうじをすると、自分の心も清々しくなるし、次に使う人も気持ちよく使うことができる。そして、施設の人からも「ありがとう。」といわれ、一石二鳥ではなく、一石三鳥だなど思った。

サッカー日本代表がやったことと私たちがやったことは、感謝の気持ちをもってそうじをするということが同じだ。でも、日本代表選手と私たちでは、ちがうところがある。私たちは、もつとこの時間が続けばいいのにと思うくらい、楽しく過ごさせてもらった施設に感謝の気持ちをもってそうじをしたが、日本代表選手はちがう。日本代表選手は負けてしまつて、くやしくて悲しくて、本当ならロッカールームをぐちゃぐちゃにしたかっただろう。それでも日本代表選手は、今やるべきことはと考え、気持ちを切りかえて、試合をさせてもらったこの場に感謝の気持ちをもってそうじをした。

なかなか日本代表選手のような行動をとることはできないと思う。でも、どんな時でも感謝の気持ちを忘れないでいたい。そして、その気持ちを行動に表していきたい。まず私にできることは、学校や大好きなダンスを習っているスタジオなど、たくさんの人と関わっている場所からきれいにしていきたい。そして、クリーンアップに参加し、大好きなこの町をきれいにしたい。「ありがとう。」という感謝の気持ちを込めて。それが、中区をよりよい町にする第一歩だと私は考える。

〈講評〉

ワールドカップで日本が取った行動と、宿泊体験での自分たちの行動を重ね、感謝の気持ちをもつことがよりよい街づくりの一步だと考えています。たしかに、感謝の気持ちを誰もがもつていれば、お互いに尊重し合い、争うことはなくなりそうです。宿泊で利用した施設を一生懸命にそうじした気持ちは、きっと宿の方にも伝わっているでしょう。身近で取り組めるそうじという行動を、ぜひ様々な場所で続けてほしいと思います。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「世界中のまちをバリアフリーに」

大鳥小学校 六年 宮井 萌歌

平和な暮らしがずっと続くこと。これは、世界中のだれもが思っていることだと思います。平和な暮らしが続くためには、だれもが安全に住めるまちづくりが必要だと私は考えます。

今の私たちのまちは、決して安全ではありません。体の不自由な人や高れい者、妊産婦、幼児などにとって、社会生活上大きなバリアとなっているのは、道路や交通機関です。

私がまちなかを歩いていたら、排水口のみぞに車イスの前輪がはさまって困っている人を見つけました。「大じよぶかな」と思ったら、大人の人が助けに来て、無事に車イスは排水口のみぞから出されました。ちがう日には、目の不自由な人が歩いてくる道に看板がありました。「ぶつかったら大けがをするかもしれない」と思っただけの看板をよけたら、その人は何事もなく通り過ぎていきました。この時、私は「このまちなかにはバリアがたくさんあるな」と思いました。ちなみに、「バリア」は不自由な人たちが利用しにくい状態、「バリアフリー」はだれもが利用しやすい状態のことです。

よりよいまちにするために、また平和であるために、自分になにができるのだろう。そう考えて私は、ちよつとした注意でバリアは減らせると思いました。例えば、点字ブロックの上に自転車置いてあつたらどけたり、歩道の上に物を置かないことです。これらの事なら、みなさんも簡単にできるでしょう。

ただ、バリアフリーと平和とがすぐに結びつかない人もいると思います。確かに、自分だけが守っても、それがよりよいまちづくりや、平和につながるのには難しいと思います。しかし、みんながそれぞれ身近な事から守っていけば、それはやがて平和につながるのではないでしょう。

まちの中はバリアだらけとはいっても、体が不自由な人でも使いやすい設備が少しずつ増えています。例えば、音楽が流れる信号や階段しかない所にスロープを設けたり、ノンステップバスを走らせていることです。

世界中のどんな所であっても、一人一人がバリアを意識し、バリアをなくしていくと、安全・平和につながると思います。平和な暮らしがずっと続いてほしい。そしてバリアフリーな場所が今までより、もっと増えてほしい。私たちにできることは、身近な事からバリアを減らすこと。そして、体の不自由な人がいたら、まずは、「なにか自分でできることはないかな」と思う気持ちを持つことです。小さな事のように思いますが、実はそうではありません。みなさんもいつしよにはじめてみませんか。

〈講評〉

町の中には、気づきにくいバリアがたくさんあります。それらに困っている人がいたり、またそのような人を助けたりする場面が、日常少なからず起こっています。バリアを完全に取り除くことは難しいですが、減らす努力をすることは大切です。文章の最後にあるように、「なにか自分でできることはないかな」という視点で周りを見てみると、きっと発見があるはずです。自分たちができることを、一人ひとりが取り組んでいくことが大切になりますね。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「私が考えるすてきな町」

大鳥小学校 五年 河村 奈心

私は3年生の時に大鳥小学校に転校して来ました。最初はだれとも話せなかったけど、クラスの人が「友達になろう」と話しかけてくれて、すごくうれしかったです。その後も、色々な人から「友達になろう」と言われたり、自分から言ったりしていっぱい友達ができました。みんな親切で遊ぶ時もやさしく声をかけてくれて、大鳥小学校は元気で明るい友達がたくさんいるんだと思い、大鳥小学校が大好きになりました。そこで私はこの町が今よりもっと人とのつながりを深め、楽しくすごしていける町にするには、どうすればいいか考えました。それは二つあります。

一つ目は、声かけです。私が大鳥小学校に転校して来て、クラスの人に初めて声をかけてもらって、すごくうれしい気持ちになりました。なので町で出会った人にも「おはようございます」や「こんにちは」などを笑顔で言っていると、気持ちがいいし、相手も自分もおたがい笑顔になれると思います。

二つ目は、だれにでも親切にすることです。私が大鳥小学校に転校したばかりの時、初めての日直で何を言うか分からなかった時クラスみんなが「こう言うんだよ」「大じょうぶ、あわてないで」など言ってくれておちついて日直をすることが出来ました。その時のクラスみんなが親切にしてくれたことでもっとクラスが好きになりました。なので町でこまった人を見かけた時は、自分から「大じょうぶですか」「どうしましたか」など声をかけていきたいです。そうすればおたがいがもっと良い関係を作って行けると思います。

私は声かけとだれにでも親切にすることをしたら、この町が今よりもっと人とのつながりが深まると思います。私はこの本牧の町が大好きなので、ずっとこの町に住んでいきたいです。そして、クラスみんなが私にやってきたように町の人に声をかけたり、だれにでも親切にして、この町が元気で明るくなり人とのつながりがある町になっていったらいいなと思います。

〈講評〉

転校した当初にどきどきしていた様子、そこから徐々にクラスに打ち解けて学校が好きになっていく様子が、会話を中心に伝わってくる作品です。何気ない一言でも、それが相手にとっては嬉しいということがあります。そのような言葉や行動が広がっていけば、みんなが住みたいと思える町になりますね。困っている人がいたときには、少し勇気をもって声を掛けてみるとよいでしょう。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「ゆずりあい」

北方小学校 六年 鱒部 みか

私は、より良いまちをつくるために、「ゆずり合い」が大切だと思います。

二〇二〇年には、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、野球・ソフトボール・サッカーの会場となる横浜にも大勢の外国人が来ることが予想されます。その中には、障害のある方やベビーカー・車いすで移動しない人と危険です。しかしながら、エレベーターは健常者優先で利用している場面が多く、なかなか乗ることが出来ずにいるのが現状です。

実際に、私がよく利用する元町中華街駅は、駅ホームが地下深いので、地上からホームまでのエレベーターを、健康な人も多く利用しています。しかし、エレベーターは一台しかなく、ベビーカーや車いすの人は、先にいた健常者数人が乗ったために乗ることができず、後から来た健康な人に先に乗ってもらい、次のエレベーターまで待つて乗ることが多々あります。

私や母も、元町中華街駅のエレベーターをよく利用しますが、ベビーカーや車いすの人がいたら、どうぞと先に乗ってもらい、乗れたらエレベーターに乗り、乗れないようであればエスカレーターで行くようにしています。「お先にどうぞ。」と言うと、相手は「すみません。ありがとうございます。」と笑顔で返してくれるので、ゆずった私もうれしくて笑顔になります。

私のおじいちゃんも、体調が悪く、車いすでの移動をよぎなくされてきました。そのため、エレベーターを利用しなければならぬことがたくさんありましたが、遠回りをしなければならぬ上、乗るまでに時間がかかるので、移動には、かなり時間と余裕を持って動く必要があります。それでも、エレベーターに乗る回数が多くなると、待ち時間も多くなり、移動だけで非常に多くの時間が取られてしまい、おじいちゃんも疲れてしまつてかわいそうだと思います。また、そんな状況を考えると、出かけるのをためらつてしまい、おじいちゃんは、あまり外出しなくなつてしまいました。

健康な人は、エレベーターを使つてはいけなわけではないですが、エスカレーターや階段を利用することも出来るので、エレベーターを利用する際、周りに障害のある方や車いす、ベビーカーを利用している人がいたら、ぜひ、「どうぞ」と先に乗せてあげてほしいと思います。そうすれば、障害のある方や車いす、ベビーカーを利用する人たちも、出かけやすくなり、毎日楽しく過ごすことが出来ると思います。

私たち一人一人が、周りに目を向ける余裕を持ち、「ゆずり合い」の気持ちを持つていけば、みんなが楽しめる、みんなが笑顔で過ごせる二〇二〇年になり、今までより良い街良い未来になつていくのではないかと、私は思います。

〈講評〉

ゆずり合う気持ちをもつことが大切だということを、日常の場面から考えている作品です。誰にとつても便利なエレベーターですが、エレベーターを必要としている人が周りにいないかよく見ることは大切です。また、自分のおじいちゃんが体験した話を入れることで、ゆずり合うことの大切さを強調しています。障害のある方が安心して過ごせる町を作りたいとみんなが思っていれば、きっと笑顔が増えていき、二〇二〇年の東京五輪もよいイベントになると思います。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「挨拶の力」

立野小学校 六年 相馬 琢人

僕が東京から横浜に引越してきた時、気づいたことのひとつが、近所の人がよく挨拶をしたり、一声かけてくれたことだ。よく知らない人でも、近所の人みんな挨拶をしていた。東京ではマンションの中では挨拶をするけれど、一歩外に出たら、知らない人とは挨拶はしなかった。横浜に引越してきて、挨拶をしてくれる人たちに最初は少し戸惑ったが、これはちよつとした仲間意識を持つ為の、とてもいい習慣だと思ふようになった。なぜなら、挨拶をすることで、よく知らない人とも、つながりを作ることが出来るからだ。

地域の人々のちよつとしたつながりは、とても大事なことだと思う。例えば、僕の弟がまだ5才だった頃、近所で迷子になったことがある。この時は、一〇〇メートル程離れた家の方が弟を保護してくださり、町内会名簿を使って父まで連絡してくれた。この方は、弟が少し不安そうに歩いていたので、声をかけてくださったそうだ。おかげで弟は事故にあうこともなく、無事家に帰ることができた。僕が小学二年生だった頃、家のかぎを忘れて困っていた時は、近所の方が声をかけてくれ、親が家に帰るまでその方の家へ上げてくれた。この時はとても暑い季節だったし、僕はどうしていいかわからなかったもので、本当に助かった。他にも、公園の近くの家の方が、子供が安全か時々見てるから大丈夫、と親と話していたり、近所の方が旅行などで留守にする時は、お互い留守中に不審者がいないかを見たり、と、特に大した手間ではないけれど、やってくれるととても助かるし、生活の安全につながることをしてくれる。

こういった近所のちよつとした助け合いは、東京に住んでいた時は、あまり経験しなかったことだ。人が困っているような時、手を差し伸べるべきかわからないことがある。知らない人だしかえって迷惑かもしれない、と思うと、おせっかいはやめておこう、と思ってしまう。それなのに、なぜこういう助け合いが僕の近所ではあるかといえば、やはり挨拶のおかげだと思う。普段から挨拶をしていると、ちよつとした仲間意識ができて、手を差し伸べやすくなると思う。そして同じ地域に住んでいる者同士、仲間として普段から挨拶をしていると、いつも話すような親しい仲にはならなくても、仲間としてつながることが出来るのではないだろうか。こういうつながりは、地域の安全にもつながると思うし、何よりも住んでいて、心強い。いい街には、きつといい仲間意識と助け合いがあるのだと思う。

学校からも親からもよく、挨拶をしよう、といわれる。普段はあまり意味を考えないが、仲間同士仲良く暮らそう、何かあったら助け合う仲間だよ、という意味が挨拶には含まれるのだと思う。横浜をいい街にする為、これからも、積極的に笑顔で挨拶をして、横浜の地域の力を強くしていきたいと思った。

〈講評〉

挨拶は大切という言葉はよく聞きますが、地域とのつながりを深められるということに挨拶の力を感じています。挨拶は、人と人をつなぐもつとも簡単で、もつとも効果的な方法です。自然にできるようになると、自然と相手とのつながりも強くなつていきます。ただ、知らない人に自分から挨拶をするというのは、少し勇気のいることかもしれません。勇気を出すこととともに、誰もが自然に挨拶し合える雰囲気地域にできるといいですね。

中学生部門

☆☆☆金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）☆☆☆

「明日の社会への選択肢」

横浜雙葉中学校 三年 小田 夏奈香

七月のある日、国道沿いを歩いていたら私は背後からの声の威勢のよさに、思わず足をとめた。やってきたのは、月末に行われる選挙の候補者の選挙カーであった。名前と挨拶を繰り返すこの活動に、どんな意味があるのだろうか。大人たちはこれを聞いて、この何を思うのか。他人事のように思いながら歩きだしたところで、あることに気付いき、私は再び立ち止まった。

大人になるまでに残された時間。十八歳で成人となる今、十五歳の私が選挙権を持つのは、そう遠い先のことではないのだ。政治の話なんて大人の問題だと、選挙に興味を持ったことがなかった。たった三年後、私は、どうやって自分の一票の投じ先を決めればよいのだろうか。

少しの不安を感じ、町に掲示された選挙ポスターを見た。「未来に責任」「平等な社会の実現を」など、耳障りは良いが少し曖昧な言葉が並び、これだけで候補者を選ぶのは難しいように感じた。そこで、候補者達のホームページを開くと、公約というのが掲げられていた。子育て支援、税率引き下げ、教育費・医療費の無償化、原発の廃止。多岐に渡る公約があった。子育て中のお父さんお母さんなら、幼児教育の無償化に心惹かれるだろう。高齢の方なら、医療費の無償化はぜひ、実現してほしい事柄だろう。音楽活動の活性化とか、芸術支援という公約は、生活に必須ではないけれど、社会を豊かにすることができるのではないか。公約を読みながら、私はいつの間にか、ある一つの問いを、繰り返し自分に投げかけていた。

「私たちの社会を、より良くするために、今一番必要なことは何だろうか。」

そして気付いたのだ。選挙に参加するとはこういうことではないだろうか、と。選挙をきっかけに、一人一人が自分の生活を顧み、社会を顧み、「よりよい社会」について考える。身の回りの問題や解決したいことに思いを巡らせ、今日よりも明日を明るくできるよう、自分なりの答えを出してみる。そして、答えを具体化するために、候補者達の公約などに触れその声を聴き、考える。そして、自らの一票を託す。子育て中の方、高齢の方、立場によって「よりよい社会」の形は違い、導く答えも皆違うだろう。しかし、それでよいのだ。多様性ある価値観を通してこそ、本当の意味での「よりよい社会」が築き上げられていくはずだからだ。

数日後、私はまた、街を走る選挙カーに遭遇した。ただ、大きな音だと思っていたその声を聴くために、この日は足を止めた。なるほどな、と思った。そういう考えもあるのかと、一つ視野が広がった。もつともつと多くの声を知り、明日の社会への選択肢を、増やしたいと思った。

三年後の私は、どんな答えを出すのだろうか。選挙に参加できることに、心からわくわくする自分がいた。

〈講評〉

今年度の中学生部門は、昨年度にも増して応募作品も多く、甲乙つけがたい力作ぞろいでした。この作品は、日常の選挙カーに出会った時に感じた素朴な疑問を出発点として展開していったものです。社会を構成する様々な人々のことにも思いを巡らせつつ、社会をよくする方策と投票への参加を結び付けて、わかりやすく表現してありました。結びでは、多様な知識の習得と選挙参加への高揚感をわかりやすくまとめた秀作と思います。

☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「六年後の自分に向けて」

仲尾台中学校 一年 岩崎 実怜

「大変だ。私、六年後には選挙権を持つんだ。」

私は今まで、選挙について考えたことなんて一度もなかった。私は、この中区の一員、日本の一員としてしっかりと一票を入られるように、どのように立候補者を選べば良いか、考えてみた。

まず最初に、私が思い浮かんだのはポスター。家や、学校の周りを歩いていて、よく見かける。ポスターの雰囲気がいいな。と思った人には、好感を持つと思う。また、出身校も確認する。東大出身と書いてあったりすると、この人頭が良いのかな。うまくまとめてくれるのかな。と考える。出身地や、性別などにも、注目すると思う。私の区や、県出身の人は、身近に感じて、がんばれ。と応援したくなる。性別も、女の人が立候補している姿を見ると、活躍してほしいと思う。私は、自分だったら、最初はこのようなことに注目すると思った。

しかし、一つずつ、よく考えてみると、この決め方で、その人が良い。とは言えないのではないかと疑問が出てきた。ポスターの写りにだまされても良いのか。ポスターでの印象と本人では、全く、違いかもしれないのに。また、経歴が良いからといって、その人が、私たちのことをしっかりと考えてくれている人なのか。まとめる力のある人なのかは分からないと思った。また、出身地、性別なども一番に考えるべきこととは、その人が、私たちのことを考えてくれているのか、まとめる力がある人なのか。ということ、そこまで重要なものではないな。と感じた。

私は、その人がどんな人かを確かめるために直接その人に会ってみたり、演説を聞いたりしてみてもどうかと考えた。そうすれば、立候補者の雰囲気や、性格が自分の目で確かめられると思ったからだ。しかし、実際にそうして立候補者全員の演説を聞くとうるとかなり時間もかかるし大変だ。年に何回もある選挙で、毎回そんなに手間をかけていられないと思った。

そこで私は、「マニフェスト」という言葉を知った。それは立候補者が、もし当選したら、どのようなことをするか。というものだ。これを見れば、手間をそこまでかけることなく、しっかりとした人が選べると思った。過去の立候補者のマニフェストを見て私は、これってどんな問題なんだろう。と、私の、知らない問題がたくさんあった。私は、もっと社会のことを知らなければいけないと思った。

これから選挙権を持つまでの六年間、私は社会のことを勉強して、よりよい町にするために、しっかりと考えた一票を入れられるようになりたい。

〈講評〉

選挙について生まれて初めて考えたという中学生が、立候補者を選ぶまでにどのような考えをたどるのか、シミュレーションしながら書かれた作品。ポスターを見る(写真の出来栄えにだまされていないか?)、演説を聞く(全員の演説が聞けるのか?)、と考えていくうちに「マニフェスト」の存在を知るに至ります。考察の余地はありますが、選挙権を行使できる年齢になるまでに、たくさん学びを重ね、中区の、いや日本の将来を考えられる大人に成長してください。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「一人の国民として」

仲尾台中学校 一年 平岡 蒼空

選挙は何のためにあるのか。最近続く蒸し蒸しとしたはつきりしない天気の中、私は道のところどころに貼られている政党ポスターを眺めていた。

私は政治や選挙に興味があったため、学校の選挙管理委員になった。まず、生徒がどれぐらいの割合で選挙に興味をもっているのか、調べる事が最初の役割だった。その結果、全体の約40パーセントの割合しか選挙に興味をもっていない事が分かった。これは何かの数值と似ている。中区の横浜市議会議員選挙の約38パーセントという投票率だ。つまり、約38パーセントしか政治や行政に関心がないということにつながるのではない。さらに、年齢別で見ると最も高かったのが、60代から70代の46パーセント。次に40代から50代の38パーセント。10代は35パーセントと3番目をしめている。30代は29パーセントで、最も低かったのは20代の21パーセントだった。私は全体の投票率の低さに衝撃を受けた。これからの社会を担う若い世代がこれでいいのだろうか。改めて、選挙が何のためにあるのか考えるきっかけとなった。今の自分に来る事は、選挙管理委員として生徒に選挙に興味をもってもらうきっかけをつくることだと思う。そのためには、皆を引きつけるようなポスターをつくり、政治や行政のおもしろさを知ってもらうこと。政党ポスターは私にとって大きなヒントを得るものだった。また、家族や友人に選挙のおもしろさを話題として自分から提供することも出来ると思う。

今、香港では、民主主義派と対する中国政府の闘争が問題になっている。それに対して日本では、民主主義の第一歩ともいえる選挙権が18才からある。世界の現状を知ると、日本に当然のようにある選挙権がどんなに尊いものであるか気づく。だからこそこの選挙権をもっているだけではなく行使することが大切なのではないか。

1票では何も変わらないという人もいるが、その1票が積み重なることで、自分達にも影響するのではないか。

選挙はただ投票するのではなく自分の考えを伝える方法であり、一人の国民として権利をもつ責任を果たすためのものである。だから、私はこれからも今の自分出来る事を探し続ける。一人の国民として。

〈講評〉

中学校の選挙管理委員会とつた全校へのアンケート。その結果、学校の生徒会役員選挙に興味がある生徒の割合は、およそ40%だということが判明しました。これは、横浜市議会議員選挙の中区の投票率38%とほぼ同じ。両者の比較から、選挙への無関心に対し、警鐘を鳴らしている作品です。また、若い世代の代表として、1票の重みについても説いています。「1人ができることは限られているが、できることをやっていきたい」そんなメッセージが込められています。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「一票の意味」

仲尾台中学校 一年 軍司 励

選挙というのは今までどおり大人の世界のもので僕には関係のない事だと思っていた。

先日テレビを見てると立候補者が決められた時間内に一生懸命自分の公約を語っていた。これは政見放送なのだが皆それぞれに、安心して働けるとか、子育てしやすいかどうかわからないものまで公約は様々だ。立候補者の熱意が画面から伝わってくるけれど、いつも見るニュースのアナウンサーとは違いちよつと不思議な雰囲気も面白くも感じた。

当然の事ながら僕には選挙権もなくたいした興味もないけれど、母親に「誰に一票入れるのか」と聞いてみた。返事は「迷うけど、選挙には行かないとね」という答えが返ってきた。選挙は国民に与えられた貴重なチャンスなのだとも言っていた。生活をしていてこうなつたらいい、こうしてほしいという思いをたつた一票に託すらしい。大げさな、たつた一票で何が変わる、と思った。不平不満や要望は直接行政に言えばいいじゃないか？でもそうすると行政は国民の話を聞く仕事に追われるだろう。町内会長さんに話をしてはどうか？もしかしたら会長さんはまともにとりあつてくれないかも。ではネットに拡散するのは？今どきのやり方だけど僕にはそれをやる勇氣も度胸もない。デモも同様、参加する事はできても主導するなんて考えられない。そんな風に僕はいつの間にか自分が大人になつたとしていろいろ考えていた。となると結局のところ自分の考えと一致する人や政党に一票投じるのが一番合理的で公平でストリートに数字に反映するのではないかと思えてきた。大げさだと思つていた一票は本当に貴重な一票なのかもしれない。再び母に質問する。ではどんな政治を行つてほしいのかと。国際、環境、問題は沢山あるけれどそれは便利な世の中ばかりを考えてきた私達のツケなのだ、目先の利益にとらわれず、人類が協力し合つて平和に暮らせる世の中に戻すべき。そしてそれに気づき近づける人や政党を支持したいのだと言う。この間目にした政見放送にそんな人はいただろうか？それ以上は話さなかつたけどきつと母はその中の一人に一票入れるだろう。僕はあと5年で選挙権を手にする。たつた5年後である。僕の一票が世の中を変えられるなら面白半分投票するなんて絶対にできないと思つた。もつと真面目に考えなくてはと思つた。その思いは同時に子供から社会人になりかけている自分の年齢をも意識させた。僕は社会人になる。社会の一員になるのだ。今は学校に通うことも大変で精一杯だけど、ゆっくりでも未来に向かつて社会に向けて歩いて行くこうと思つた。

〈講評〉

「一票で何が変わるのだろうか。大げさなことを言うものだ。」母親との会話からそんな感想を抱いた筆者でしたが、自問自答を繰り返すうちに、一票のもつ意味に気づき、未来に向けて決意を新たにしている中学生の率直な意見が書かれた作品。子どもから大人になりかけている中学生の自分という存在を前向きにとらえ、素直に書かれた文章は、さわやかな読後感を残してくれます。13歳の目線を生き生きと感ずることができ、若い世代への期待を抱かずにはいられません。

「選挙による暮らしの変化」

仲尾台中学校 一年 谷口 はるか

みなさんは、選挙によってどのように暮らしが変わると思いますか。選挙前になると、テレビで候補者の演説が流れる時があります。その演説の内容は「私はこのような政策があります。それを実現するためには皆様の一票が必要です。」というものでした。では、本当に私達の暮らしは変わるのでしょうか。

私は、小学生の時、運営委員会に入っていました。運営委員会の活動は、主に学校で行うイベントの改革です。前の年と同じイベントだとしても、より盛り上げるためにいろいろな案を出し、話し合いをします。しかし、これは委員会だけで決められることではありません。全校児童の意見を聞きます。ですが、委員だけでは全員の意見を聞くことはできません。そこで各クラスで代表者を決め、その代表者がクラスの意見をまとめ、その人たちと話し合いをして、決定をします。これによって、全校児童の意見を聞いたことと、同じことができます。この仕組みは、規模は違いますが、国会と似ていると思います。選挙で私達の代表者にふさわしいと思う人を選び、その人たちに国や暮らしについての案に私達の代わりに話し合ってもらいます。それは、クラスの意見が代表者にたくされているのと同じで、私達の意見は代表者にたくされ、暮らしも代表者の意見で左右するのです。そして、その人が様々な改革をすると私達の暮らしは大きく変わるのです。

その例を紹介します。私達の生活が大きく変わった一つが消費税です。もともと、日本には消費税がありませんでした。しかし、平成元年から消費税が始まり、生活に大きな変化を与えました。最初は消費税率が3%でしたが、少しずつ引き上げられ、今では8%、今年10月には10%に引き上げられようとしています。引き上げられる2%は、高校の無償化や高齢者へのサポートに使われるそうです。このように決まったのは、消費税の使われ方に納得し、それなら消費税率を引き上げても良いと思った多くの有権者がその政策をかかげた候補者に票を入れた結果だと言えます。しかし、この引き上げに反対する候補者もいました。この人に同意をする人が多ければ、消費税率は8%のままだったかもしれません。このように、選挙は私達の暮らしに大きく影響するのです。

年々、選挙の投票率は減少し、前回の選挙では2人に1人は投票していないという調査結果があります。しかし、国会は私達の暮らしをよりよくするために話し合いを国民の代表がする場です。そして、選挙はその代表を決めるものです。政策によっては、次の世代へつながるものもあるかもしれません。暮らしのため、将来のために、選挙に行く人が増えると良いなと思います。

〈講評〉

小学校の運営委員会のしくみと国会のしくみとの類似性に気付いた筆者が、自身の経験をもとに、国民の意見がどのように生活に反映されるかを考察した作品。「選挙によって、暮らしはどのように変わるのか。」の問いに、消費税を例に挙げて、見事に答えています。しかしながら、やはりここでも懸念されているのが投票率の減少です。「自分たちの生活そのものが変わるとなれば、選挙に行く人も増えるのではないか。」彼女の言葉通りに、選挙への無関心を減らしたいものです。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「身近な問題から選挙を考える」

横浜雙葉中学校 三年 原田 華

今年も、私は父と一緒に家の近くの投票所に行った。厳粛な投票所の中で大人たちが真剣に投票をする姿を見てみると、私は体全体で一票の重さを感じる。三年後、私は成人になり、一人前の大人として選挙権を持つことになる。その時に私は有権者の一人として責任を持って、日本の将来を大きく左右する選挙に、堂々と一票を投じることが出来るだろうか。

私は、国民の一員として選挙に参加できることは光栄で嬉しく思う反面、選挙や国の問題に関して十分な知識がない未熟な自分が参加して誰かを選ぶことができるのだろうか、不安な気持ちでいっぱいになる。近年、若者が選挙に行かず、投票率が急激に下がっていると耳にするが、その大きな理由には、若者の投票に対する先に述べたような不安や迷いが影響しているのではないかと思う。私は選挙をあまり大げさなものとは考えず、国民一人一人の身近な問題への入り口であることに気がつけば、投票率の低下も自然と抑えられると考えている。

選挙制度が始まった当初は、全人口の約一パーセントに過ぎない、二十五歳以上の男子で直接国税十五円以上の納税者にしか選挙権が与えられていなかった。平成二十七年六月、投票年齢は満十八歳以上の男女全員に引き下げられ、全人口の約八十パーセントを占めている。政府は、できるだけ多くの人が政治に関心を持ち、選挙に参加して欲しいという願いを込めて法律を改正した。それにもかかわらず、有権者が選挙を自分には関わりのないこととして、無関心のままでは元も子もない。私も含めて特に次世代を担う若者が、選挙に積極的に関わることが大切だと思う。

そこで、私たちの暮らしに身近な地方選挙を取り上げて考えてみることにしたい。「地方選挙」は、都道府県や市区町村の首長や議会の議員を選ぶための選挙である。そこで当選した議員は、自分たちの地域の町内会や商店街などへ自ら足を運び、より多くの市民の声を傾ける。ここでは学校運営、ごみ収集、水道料金など私たちの暮らしに直接かわる問題が取り上げられることが多いはずである。まさに市民の意見が首長や議長を通して政治に届き、市民の暮らしが改善されていく。私の住む町でも少子高齢化が深刻な問題になっている。以前通学に使っていた市営バスも年々本数が減らされている。選挙を含めて政治に参加することは、私たちにとって決して遠いところの問題ではない。むしろ身近な生活に深く結びついているのではないか。

私は、少しでも多くの人々が選挙に興味を持ち、身近な存在であることを実感してくれたらと心から思う。選挙について詳しい仕組みが分からなくても、私はまず投票所に足を運んでみたい。そして、自分の一票が日本の未来を大きく変える第一歩になるかもしれないとウキウキしている。

〈講評〉

筆者と同年代の若い世代から疑問の声が上がりそうな「選挙とは私たちに身近な存在である。」という定義を、論理的に証明することに成功した作品。選挙制度の歴史を概観しつつ、選挙権年齢の引き下げに至った目的が「若い世代の積極的な政治参加を促すこと」であったことに触れ、政治への無関心がその目的に逆行するものであり、また無関心は知識や経験の無さに起因する不安や迷いによるものだという指摘も的を射ています。若者の政治参加への妙案を期待したくなります。

審査をふりかえって

皆さんの真剣な作文を真摯に読ませていただきました。

小学生A部門に於いては、中区の住民としての「この町のじまん」がとても誇らしく書かれており、それは公営施設であったり、近所のおじさんおばさんであったり、キラキラした瞳で「じまんしたいんだ」という素直な気持で町を見ているんだな、と思わせる表現が随所に見られ、審査員一同笑顔になりました。

小学生B部門に於いては、「街を見る目」が大人のそれに成長しており、公共交通機関に携わる方たちであったり、警察官の方や消防士の方たちへのプロフェッショナルを尊敬するまなざしが見られ、自分が大人になった時にどう街に貢献できるかを書いた作文が数多くありました。まことに頼もしい限りです。

中学生部門に於いては、選挙権年齢が引き下げられたことにより、より身近なかたちで選挙をとらえ、民主主義の至上構成システムである選挙によって、いかに自分の住む中区を、そして世の中を良くしていけるのかを真剣に考えた作文が多いことに感銘を受けました。投票する、という「一票の権利」を行使することで、世の中全体をどう変えていくか。深い考察に裏付けられた皆さんの意見には深く頭を垂れざるを得ません。

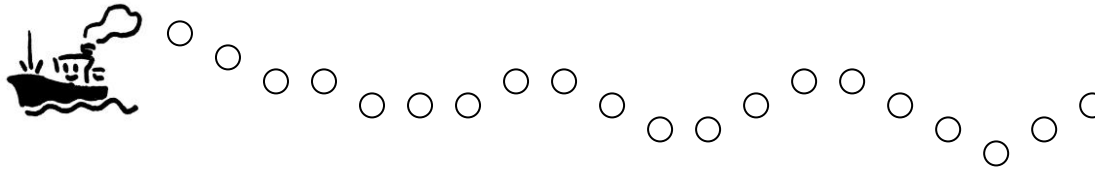
今回の審査を通じて、皆さんの前向きな明るいパワーを有意義に生かすべく、我々大人も頑張らねばならないといまふたび痛感させられました。今回の作文を執筆したすべての皆さんに大きな拍手と称賛を贈らせていただきます。「この先の未来」に向けて、ともに力を合わせていきましょう。



■作品の選考・講評■

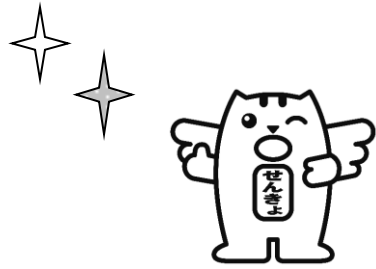
横浜市立北方小学校教諭	菊地 伸行
横浜市立大鳥小学校教諭	角田 峻介
横浜市立港中学校教諭	河地 瑞彦
横浜市立港中学校教諭	國分 英幸

横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	大村 崇夫
横浜市中区選挙管理委員会委員長	佐藤 綾夫
横浜市中区長	竹前 大



第39回
中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集
令和2年1月発行

発行
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所
〒231-0021
横浜市中区日本大通35番地
TEL 045-224-8119
FAX 045-224-8109

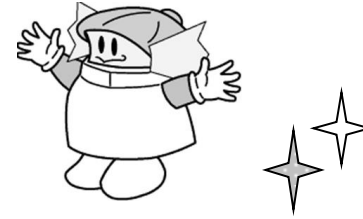


あか せんきょ
明るい選挙キャラクター
せんきょ
選挙のめいすいくん



©KUSUMI / GX and NAKA-ku

よこはましなかく
横浜市中区のマスコット
スウィングー



よこはましせんきょ
横浜市選挙のマスコット
イコット Jr.